

# 「ニホン英語」は大学英語教育の目標になりうるか

● 中 村 聡

## Summary

This paper examines the acceptability of *Nippon English*<sup>1</sup> in English education in Japanese universities. Nippon English, proposed by Suenobu (2010, 2011), is a variety of World Englishes which is based on the system of the Japanese language and Japanese culture. Suenobu in his book and article claims that American or British English, which has been traditionally a model variety of English in Japanese schools, should be replaced with Nippon English for every Japanese learner to easily master English as a means of international and intercultural communication. Taking into consideration the limitations of the teaching of Nippon English, this paper will discuss the application of it to actual teaching practice in university-level English education in Japan.

## 1 はじめに

本稿では、末延（2010, 2011）の提唱する「ニホン英語」が学校（大学）英語教育の場で受け入れられるとすればどの程度可能なのかについて論じる。一言でいえば、末延のニホン英語論は、英米のネイティブ英語を目標にしてきた日本の学校英語教育が、その目標を、日本語の体系と日本の文化を反映した「ニホン英語」で十分とする現実的なものへと変えるべきという、きわめて刺激的なものである。<sup>2</sup> これは、日本の学校英語教育の性格を根底から揺るがしかねない提言であるため、英語教育界からの強い反発を受けているが、大学生の多くが「英語を実際に使えない」実態をはがゆい思いで見えてきた筆者自身は、末延の主張には汲むべき点も多いと考えている。以下、第2節で末延論点の要旨を示し、第3節では末延論の問題点を指摘する。第4節では、現行の（大学）英語教育にどのような形で末延案を取り入れれば、「英語を使える」大学生を輩出する方向で改善が図られるのかについて論じることとする。

## 2 ニホン英語論の要旨

末延（2010）は「ニホン英語」を「すでに古くから日本の歴史と文化の中で、先人たちが、あれこれと苦労しながらも、うまく使えるように育んできた体系的な言語であり、日本人らしい発音と文法を持った、無駄なくなじみやすい」（p.97）アジア英語の中の一変種と定義する。そして、アメリカ英語への憧れ、アメリカ英語への畏敬の念、ネイティブ・スピーカー信仰から「かつての文部省、そして現在の文部科学省は、一貫して今も英米英語の発音と文法の教育をその目標としている<sup>3</sup>」（p.12）ため、多くの生徒・学生はその目標にはるかに及ばず、挫折感を味わい、英語嫌いを輩出していることを非難し、英語を使いこなせる若者を増やすには、単に教養を高めるといふ目標やネイティブの英語に近づけるといふ非現実的な目標ではなく、学生の将来を見据えた現実的な目標として、世界でもわかりやすい発音であるカタカナ英語を音声体系にもつ「ニホン英語」を使えるようにするべきであると末延は主張する。末延が挙げるニホン英語の言語的特徴の概略を次に示す。

## 2.1 ニホン英語の発音

単語をひとつずつ丁寧に、五十音どおりに発声すれば、世界中の人が理解できるものを、日本人はかっこよく発音するだけのために、わざわざ回り道をしてアメリカ流にもどまね英語を話す、と言う末延（2010）は、「ニホン英語」は次の点を心がけて発音するようにすすめる。

- a. スピードを重んじる英語は、経済効果を優先し、子音が中心になり、母音を疎かにする傾向があり、母音だけでなく、語尾の子音をも脱落させてしまう。子音中心なので遠くまで聞こえにくい。一方、子音と母音が交互に現れる日本語、ロマンス諸語、インドネシア語などは、母音が強調され遠くまで明瞭に聞こえる。したがって、カタカナ英語のマップ（mappu）、マット（matto）、マック（makku）のように、語尾に母音を付加し、語尾をしっかりと発音して、語レベルでの明瞭度を高める。
- b. 英米人の流れるように単語を連続させる話し方はネイティブ同士特有の発音の特徴であって、ノン・ネイティブには聞き取るのが大変である。ノン・ネイティブの理解度を高めるために、ニホン英語では、単語の区切りどおりに切って、念を押すように、はっきりと話す：The/first/auction/this/season/started/at/3: /30/this/morning.

さらに発音の簡略化はかまわない、とする。

- c. 英語の母音はすべて日本語のアイウエオの5つの母音でまかなうことが可能。二重母音も長母音で代替できる。
- d. 英語の子音/θ/は/s/や/t/、/f/は/h/に置き換えればよい。/r/対/l/などの発音の区別を厳格に求めない。

（末延 2010: 22-23, 27-35, 203-204に基づく）

## 2.2 ニホン英語の文法

(1)-(13)はニホン英語の例である。これらはすべて英米の英文法という面から見ると正解ではないが、意味は理解できるという点でニホン英語としては容認される、と末延は言う（括弧内がネイティブ・スピーカーの英語）。

- (1) I have ball and bat. (I have a ball and a bat.)
- (2) I like apple. (I like apples.)
- (3) The police is here. (The police are here.)
- (4) I want to buy shoes. (I want to buy a pair of shoes.)
- (5) Are you difficult to paint a picture? (Is it difficult for you to paint a picture?)
- (6) This pen is high. (This pen is expensive.)
- (7) Mr. Yamada teach English. (Mr. Yamada teaches English.)
- (8) I drink soup. (I ate soup.)
- (9) How many rackets is Jane have? (How many rackets does Jane have?)
- (10) He work yesterday. (He worked yesterday.)
- (11) Look up it in the dictionary. (Look it up in the dictionary.)
- (12) I don't understand what did he say? (I don't understand what he said.)

(13) Don't you have some tea? No, I drink. (Don't you have some tea? Yes, I do.)

(末延 2010: 101-107より抜粋)

(1)-(3)は単数・複数の区別, (4)は数量詞, (5)は代名詞, (6)は形容詞, (7)-(9)は動詞, (10)は時制, (11)と(12)は語順, (13)は yes, no の使い分けに関して, 最低限通じるか, 実用的かどうかを基準として, 文法・語法のルールの緩和をしたものである。

これらのネイティブ英語から見れば明らかな間違いを「よし」として認めることは, 末延のエラー研究の結果, すなわち, ことばの間違いが自由に許される環境で学んだ学習者と厳しい環境で学んだ学習者を比べると, 前者は不安度が低くリラックスして, 間違いを恐れずに学べるので, 次第に間違いが少なくなっていく, 緊張して学ぶ後者よりも学習の進歩が見られやすい, という事実に基づいている。

## 2.3 語彙

二ホン英語の語彙は, ノン・ネイティブとして最低限のコミュニケーションの道具としてみなすことから, その数は限られてよい。例えば, 難解な語の groan, induce, declare, utter は say, talk, speak で置き換えればよく, No getting to the first base のようなイディオム, lemon (おんぼろ) のようなスラングを避けるようにする。

## 3 ニホン英語論への疑問

末延のニホン英語論の概略は以上のとおりである。さて筆者自身は, 末延の主張には汲むべき点が多いが, 現行の日本の英語教育体制を踏まえると, 少なくとも現時点では, あえてニホン英語を強く前面には出さずにいたほうがよいと考えている。その理由を以下に挙げる。

### 3.1 音声面

#### 3.1.1 英米の発音はほんとうに理解されにくいのか

世界の英語変種の中で, 世界中の人がもっとも分かりにくい変種は英米のものであるとして, 末延 (2010: 12) は次のように述べている。

国連などの会議をテレビで見ていると, 奇妙な光景に出くわす。ふだんは各国のなまり英語に, ごく普通に耳を傾ける各国の代表たちが, こと英米人が壇上に立ったとたん, いっせいに通訳用のヘッドホンをつけはじめる。なぜか。彼らの英米語が聞き取れないのだ。／通訳の助けを借りなければ, 英米人たちの英語を理解できないからだ。実のところ, 英米語をはじめ, 世界中にあるさまざまな英語の中で, 一番わかりづらいのが, 皮肉なことに英米人の話す英米語なのだ。

ここでいう「各国の代表たち」とは英語を第二言語として話す人たちであると考えるとき, この人たちが英米英語を聞き取れないのだとしたら, それは英米英語そのものに非があるからというよりも, 「各国の代表たち」が普段は自分たちのなまりの英語を聞き慣れていたために, 耳がついていかなかったとは考えられないだろうか。

また, 英米英語を最もわかりづらいと断定する根拠として, 末延はハワイ大学の Larry Smith 教授の研究調査で, アメリカ人の英語はアジアの人々に対し55%の伝達率しかないのに対し, 日

本人の英語はアジアの人々に75%という高い率で理解されていることが判明したことを挙げている。<sup>4</sup> しかしながら、テレビ画面から得た情報と Smith 教授の調査結果のみで、英米の英語はもっとも分かりづらい、と判断してよいのだろうか。「英米の英語」とは言うが、英国人の英語については調査に含まれていない。

さらに、もっともわかりづらいのが英米英語であるならば、英米以外の、第一言語として英語を話す国の英語は英米のものよりもわかりやすいということなのか、という疑問が湧く。/æ/を/e/、/e/を/i/と発音するニュージーランド英語はどうか、語頭の/h/が脱落し、/θ/を/f/、/d/を/v/と発音する英国ロンドンの下町方言であるコックニーのほうが英米のいわゆる標準発音よりわかりやすいということなのか。筆者にはとてもそうは思えない。

### 3.1.2 ニホン英語はほんとうにわかりやすいのか

ニホン英語の理解度の高さを示すために、末延(2010)は自身の2つの実験結果を挙げている。ひとつは、次のような、日本人の学生たちが「話したことを文字におこしたもの」がアメリカ人にどの程度通じるのかを確かめたものである(各文の後に理解度を示す)。

I born in Kobe and grew in Kobe.	(100%)
I'm now mandolin club.	(100%)
My family is four.	(97.5%)
I am not much money, so I can't go.	(97.5%)
I could not high school life, so I want to enjoy college life.	(92.5%)
I decided to stop to go to this college.	(92.5%)
I want to back to my high school days.	(87.5%)
I have been swum since I am in junior high school.	(80%)
I was very happy surrounding good junior high school.	(75%)
Hearing don't like very much.	(70%)
I want to do what as concerns movies.	(67.5%)
I want to be able to Chinese, and worked trade.	(62.5%)
I had a sick with my legs.	(62.5%)

(末延 2010: 112に基づく)

その結果、理解率は平均で79.2%であった。これについて、「この理解率は、発話を直接聞いた場合でもたいして変わらないだろう。日本語であっても日本人に100%理解してもらえるわけではないのだから、英語がこれだけネイティブに理解されるというのは驚異的である。(中略)このように『ニホン英語』こそ世界で最も通じる英語のひとつであるのに、大方は調査もせず、通じないとあきらめている」(p.111)と末延は述べている。しかし、アメリカ人に8割弱の理解率で通じたからといって、「ニホン英語こそ世界で最も通じる英語のひとつ」と言い切ることはあまりにも乱暴ではないだろうか。

もうひとつの実験は、日本人大学生が「話す」カタカナ英語のニホン英語に対するアメリカ人の理解度を確かめたものである。大学生80名の5分間スピーチを材料に、①スピーチに含まれる各語を、アメリカ人48名に書き取ってもらい②さらに、それらの語を含む文中で聞き取ってもらった。その結果、全体の理解率は①語だけを聞く場合は41.64%、文中で聞く場合は66.84%であ

った。これについて「単独で聞いても不明な語でも、文中で聞けば相当な理解力の進展が見られることがわかる」(同書, p.127)と末延は述べている。この実験もまた、アメリカのみを対象としたものであり、理解率は7割弱である。「ニホン英語を世界で最も通じる英語のひとつ」とするに十分な証拠とは言えないのではないだろうか。

### 3.1.3 綴りと発音の対応関係をどう教えるのか

「英語母語話者のような発音を目指す必要はなく、日本語なまりで堂々と話せばよい」という考え方に対して、手島(2011: 35)は次のように反論する。

しかし、そうした発音をする人たちから「英語は、日本語訛りの綴りで(例えば, thick は sick と)堂々と書けば良い。」という発言を耳にしたことはない。ここにこの考え方の大きな欠点が見つかる。発音と文字・綴りとの関係に目を向けていないのである。そもそも「厚い」を thick と書き、「病気の」を sick と書くのは、それぞれの語頭の音が/θ/と/s/だからである。/θ/の音だから、英語の正書法に則って、その表記は<th>になるし、/s/の音なら<s>となる、ということに過ぎない。つまり、日本語訛りの発音でよい、とする人たちは「正しい発音を身に着けると、単語の綴りが容易に覚えられる(あるいは、少なくとも大きく軽減される)」という事実を考慮していない、ということになる。(中略) fan も fun も同音で、日本語風に「ファン」と発音している学習者が、単語テストの前に友達と「“楽しい”のほうが“フン”だよな」などとローマ字の知識を「応用」して確認しあうのは目にしたくない光景である。(傍線原著)

このようなニホン英語への反論ととれる見解に対して、末延論は答えを用意していない。

### 3.1.4 音声教材はどの変種のものを使うのか

周知のように、日本の中学校・高等学校の音声教材のほとんどがアメリカ英語で録音されている。大学英語教育においても、その傾向が強い。アメリカ英語採用を批判する末延論は、音声教材としてニホン英語を吹き込んだものを教材として聞かせることをよしとするのか。それとも聴き取り練習だけは英米の発音を利用するのか、その点がはっきりしない。かりにニホン英語音声のみを使っていると、末延がニホン英語と近似しているというアジア諸英語を聴き取る際には不都合は生じないのかもしれないが、<sup>5</sup> 英・米・豪・加などの英語話者の発音を聞き取る際に困難を生じるのではないだろうか。清水(2011: 60)も

「最低限通じる」ための発音教育をうけた学習者が、その後 NS との間での英語使用が必要になったり、職業上の理由で NS の英語に近い発音が必要になった場合に、ELF の発音が障害になることはないのだろうか。音素対立のより少ない体系から、より多い体系への移行はかなりの困難を伴うはずである。この問題についての先行研究は筆者の知る限りでは見られないが、ELF 発音で英語発音を始めることの是非を考える際の不安材料であることは確かであり、今後の研究が待たれる部分である。

と指摘する。(引用部の NS は native speaker を、ELF は English as a lingua franca (国際語としての英語)を示す。)この疑問に対する回答を末延論は持ち合わせていない。<sup>6</sup>

## 3.2 文法・語法面

### 3.2.1 ニホン英語に体系的文法はあるのか

2.2節で、ニホン英語の文法とされるものを紹介したが、ここには、目標とするニホン英語の文法規則が体系的に示されていない。<sup>7</sup> 体系的ではないので、どの表現が正解で、どの表現が間違いなのかの基準が明確でない。

2.2節の(1)-(13)を「正しい」ニホン英語とみなすとすれば、学生が(7)のように、Mr. Yamada teach English. と答案に書いたとき、教師は、ニホン英語の文法規則に基づいた「正しい」英文と判断し、丸を付ける。Mr. Yamada teaches English. と書いたとしても、ネイティブが使う文法規則に従って、これも正しい文ということで、丸を付けるのだろう。では、仮に学生が Mr. Yamada is not teach English. と書いたとしたら、教師は丸を付けてよいのだろうか。意味は分かるから正解、とするのだろうか。おそらく正解・不正解の判断は教師によって分かれるだろう。つまり、(1)-(13)がニホン英語の文法・語法規則を示すものだとしても、学生が書くであろう、ネイティブ英語から逸脱したその他の事例の正解・不正解については、現場の教師の一人ひとりの判断に任されることになってしまう。このような場当たり的な指導では、学生の英語力を客観的テストで判断することは非常に難しくなるだろう。

これらの疑問は、教科書はどの英語変種を使うのか、という疑問にもつながる。おそらく、ニホン英語で書かれたものを使うことはないだろう。ニホン英語を教えるにしても、使う教科書はネイティブが使う「正しい」英語で書かれたものになるだろう。その場合、「教科書の英語も、ニホン英語もどちらも正しい」double standard 方式を取ることで、教育現場に混乱は起こらないのだろうか。

### 3.2.2 各種英語検定試験に対応できるのか

今後、日本の雇用市場が海外に拡大せざるをえない状況がやって来ることが予想される。学生が就職活動をする際に、高い英語運用力が問われることが今まで以上に多くなるだろう。自分の英語力を客観的に証明するものとして、TOEIC や実用英語検定があるが、ニホン英語を学校で学んでいる学生は、はたしてこれらの試験に太刀打ちできるのだろうか。(1)-(13)の文でもかまわないと教えられた学生は授業で学んだことの定着度を計る achievement test (学力考査) では高得点を取れるだろうが、英語検定試験のような proficiency test (習熟度テスト) ではそれを期待することは無理であろう。この疑問に対する答えを末延 (2010, 2011) に見つけることができない。

## 4 ニホン英語の発想を部分的に取り入れた英語教育

末延 (2010) によれば、現在の英語教育界のニホン英語に対する考え方は次の3つに大きく分けられるという。

- 1 英米の“本物”の英語を真似ることこそが真の英語学習だと信じる「ニホン英語タブー論」
- 2 英米英語にはがんばってもついてゆけないので、ニホン英語でも仕方なしとする「ニホン英語あきらめ使用論」
- 3 英米人ではない日本人は、自然なままのニホン英語で通じれば十分であり、それをむしろ日本人の個性と考える「ニホン英語積極的使用論」

この分類に従えば、筆者はどのグループにも属さないことになる。あえて位置付ければ、第2グループと第3グループの間ということになろうか。すなわち、

米英英語をモデルとした英語教育を行うが、ネイティブ・スピーカーの英語は到達目標ではなく、あくまで見本（モデル）として捉える。指導の結果、ネイティブに近い英語能力を見につける学生もいれば、そうではない「ニホン英語」レベルの人もある。そのようなレベルの人たちに対しては、従前のようにエラー指摘主義・減点主義で応じるのではなく、「ニホン英語」でも許容範囲という態度で接する。

という立場である。したがって、本稿の題目として記した「ニホン英語は大学英語教育の目標になりうるか」に対する筆者の答えは、条件付き Yes である。以下、発音、文法・語法、語彙指導において、末延論を部分的に反映した、ニホン英語指導の留意点を次に示す。

## 4.1 発音指導

### 4.1.1 発音モデル

筆者のこれまでの考察を通して言えることは、現時点では、ニホン英語を大学英語教育の到達目標とすることは時期尚早であろうということである。確かに世界標準とされる英語発音は英米一辺倒であった状況が、World Englishes（世界諸英語）の台頭によって、様変わりしつつあることは否めない。21世紀のいずれかの時点において、中国やインドが経済大国となるにともない、アジア勢の英語発音も優勢となり、英米の発音の威信が低落する可能性も否定できない。そうなれば、アジア英語のひとつに分類されるニホン英語も、英語圏の国々から英語標準変種として認められるようになるかもしれない。

しかし、前節で指摘したように、「正しい」ニホン英語の文法体系ができあがっていないことと、ニホン英語が世界中の他の英語変種と比べてもわかりやすい、という末延の議論は十分な証拠に欠けることを踏まえると、当面の間は、ネイティブ・スピーカーの英語をモデルとすることに落ち着かざるをえないだろう。大学英語教育であれば、学習指導要領に当たる制約がないので、<sup>8</sup>カナダ英語、オーストラリア英語を教えることもよいことになるだろう。ただし、オーストラリアは英国英語から派生し、カナダ英語は米国英語と兄弟関係にあるため、より源流に近い英国英語か米国英語をモデルとしたほうが効率的だろう

このようにネイティブ発音を見本とすることで、3.1節で指摘した疑問点、特に3.1.4節の問題点は顕在化しないだろう。

### 4.1.2 アクセント指導

ニホン英語においてアクセントをどう扱うのか、末延（2010）および末延（2011）では触れていない。ニホン英語では英語の子音・母音を日本語の子音・母音で代用するのであれば、せめて語アクセントをきちんと意識して発音する必要がある。「大切なのは強勢。語の強勢と文の抑揚が通じるかどうかの分かれ目になる」という見解は音声研究者の間で強い（鈴木1992 他）。だが、最近の大学生の多くは、①アクセントのある音節は強く高めに②そしてやや長く発音し、③その他の音節は弱く、短めに発音する、という英語アクセントを習得できていない。その結果、アクセントのある音節とそうでない音節の高低差が少ないままに、語を発音する傾向がある。<sup>9</sup> アジア圏の英語話者は②と③の特徴をもたない英語を話す傾向があるものの、①の特徴をもたない話

し手は少ない。ニホン英語の理解度を高めるためには、少なくとも①の特徴は意識して発音するよう、教員は指導すべきと考える。

## 4.2 文法・語法指導

末延 (2010, 2011) が言うように、文法的・語法的に正しい英語を話そうと身構えているために、英語で発信することが苦手になってしまうのだとしたら、文法的・語法的正しさを過度に強調することは教育的配慮に欠けることかもしれない。したがって、(1)-(13)のような文を生徒・学生が発したり、書いたりしても、減点主義に走るべきではないことは、末延のニホン英語論の言う通りだろう。

ただ、3.2.2節で述べた問題点、資格試験対策のことを考えると、また、学生が就職後にニホン英語よりも高い英語力を求められることも十分あることを考えると、ネイティブ英語では正しいとされる文法・語法も、学生は身につけるよう努めるべきだろう。一般的に人は、話しことばでのエラーよりも、書き言葉での間違いを重視する。話しことばは一時的ですぐ消えてしまうのに対して、書きことばの方は、長期間にわたり残り（電子データであれば永遠に残ることもありうる）、書き手の教養を映し出すものと考えられている。大学生たちが今後、仕事で英文を書かねばならない状況に立った時に、ニホン英語以外の英語変種の使い手から見下されることのないように、ネイティブから見て正しいとされている語法・文法を教える義務が教員にはある。

## 4.3 語彙指導

語彙については末延論と重なる部分が多い。すなわち、今日の大学試験のように、難解な語の知識を問うのではなく、基本的とされる語を確実に身につけさせる方針で臨むべきであろう。基本語の hate で置き換えられる abhor (嫌悪する) のような難易度の高い語や、英語圏の文化体系に組み込まれているイディオム、例えば、tell off (叱る)、give in (屈する)、let the cat out of the bag (うっかり秘密も漏らす) のようなものは、学生個々人の到達目標にもよるが、必ずしも覚えなくてもよいものとするべきである。同時に、ネイティブ・スピーカーは、ノン・ネイティブとコミュニケーションをとる際には、これらの語の使用を避けるように心がけなければならない。<sup>10</sup>

このことと関連する動きとして、Nerriere & Hon (2009) は、インターネット時代の国際コミュニケーションのための中立な言語として、英語を簡略化した Globish の使用を提唱し、26万語あるとされる英語の語彙を1500語に減らすことを提案している。<sup>11</sup>

## 5 おわりに

前節で述べた、米英の英語をモデルとすることのメリットにもかかわらず、現実にはモデルとするネイティブ・スピーカー英語に近づくことを無理とあきらめる、近づくことをためらう、あるいは嫌悪する生徒・学生は、英語をコミュニケーションの道具として使う能力を高めることに行き詰まってしまうことも、おそらく末延 (2010, 2011) の指摘するとおりであろう。このことは率直に認めなければならない。日本の学校英語教育が本当の意味で、英語でコミュニケーションがとれる日本人を輩出することに本腰を入れて取り組んできていなかったことの証でもある。

英語ができるようになってから使うというのでは、いつまでたっても使えるようにはならない。ネイティブの英語をモデルとはするが、全員の到達目標として高く掲げることはせずに、ネイティブ並みの英語は使えなくとも、日本人っぽい英語でも許容範囲、という視点に立った英語指導



を行い、そのレベルでもよいから、外国人と英語を使って話す機会、英語を書く場面をどんどん増やすことで、英語嫌いは減らせるのではないか。大学レベルでの英語教育の現実的目標を「ニホン英語」運用力に求めてもよいのではないか。大学までの英語教育は「英語を使うことに自信をもつ」学生を世に送り出すことを目指せばよいのではないだろうか。

しかし一方で、ネイティブ・スピーカーのように話したい、書きたいと願う学生が少なからず存在することも忘れてはならない。彼らの動機を不純なものとして扱ってはならない。そのためにも、教員は研鑽を積み、できるだけネイティブに近い英語運用力を身につけていなければならない。教員の側が/θ/対/s/, /l/対/rなどの発音の区別ができない、ということがあってはならない。

## 注

- 1 本稿では、末延が呼ぶところの「ニホン英語」を英語では Nippon English とする。末延 (2011) では、ニホン英語を日本人にとって「外国語」ではなく、「第2の日本語」としてとらえ、英語名を Open Japanese としている。
- 2 本名 (2003) も、一般の日本人が達成できる目標として「ニホン英語」(本名は英語名を Japanese English としている) の習得を勧めている。ただし、ニホン英語の内容については具体的な言及はしていない。
- 3 末延 (2011) は日本の英語教育が「英米語」を目標にしていると言うが、実際には日本の中学校・高等学校の教科書は発音・語法・綴りの面で、イギリス英語ではなくアメリカ英語に基づいていることがほとんどである。そもそもアメリカ英語が日本の英語教育で選ばれた理由は、末延が書いているような「かっこよさ」といった感情的理由ではなく、第二次世界大戦後から今日に至るまでの日米の関係を反映した政治的なものと考えべきだろう。
- 4 この実験の内容に関する記述は末延 (2010) にはなく、出典も示していないが、末延 (2011) を読むと、Larry Smith, et al. “English for Cross-Cultural Communication: The Question of Intelligibility”, *TESOL Quarterly*, Vol. 13, No. 3, Sept. 1979 のことだと分かる。
- 5 津田 (2011) は、国際英語のさまざまな特徴は話している人の母語の数だけ多様に異なっており、多層や特徴ゆえにわかりにくいことが多いのが実情、と言い、インド人、中国人と英語で話したときに理解することが大変だったという自身の経験を挙げている。榎木園 (2012) は、著書のまえがきで、インド英語のわかりにくさに言及している。ちなみに、筆者の授業でもインド英語、マレーシア英語、フィリピン英語などのアジア英語の変種を学生に聞かせることがあるが、「聞き取りやすい」と答える学生とそうでない学生とは半々ずつであることが多い。このように、アジア系の英語が聞き取りやすいかどうかは個人によるのであるが、日ごろからニホン英語式の発音になじんでいる人であれば、アジア英語を比較的楽に聞き取れるのではないかと想像できる。
- 6 「自分にできない発音は聞き取りにくい」とする松澤 (2004) らの見解に、末延はどう対応するだろうか。
- 7 末延自身も、英文法のルール一つひとつを見直し、コミュニケーションの道具として最低限通じるか、を基準とした文法事項の重要度別整理が必要なこと、詳細なニホン英語ルールの研究がなされなくてはならないことを認めている。
- 8 ちなみに、「中学校学習指導要領」(2008年)には習得モデルとする発音について、「現在、英語は世界中で広く使用され、その使われ方も様々であり、発音や用法など多様性に富んだ言語である。その多様性に富んだ現代の英語の発音の中で、特定の地域やグループの人々の発音に偏ったり、口語的過ぎたりしない、いわゆる標準的な発音を指導するものとする」(傍線は筆者)とのくだりがある。

しかし、この記述は言語学的に言えば、現実にはありえないことを書いていることになる。「特定の地域やグループの人々の発音に偏らない発音」は現実にはありえない。それに近いものを探し出そうとすれば、英国英語の RP (Received Pronunciation: 容認発音) が中立的な発音として挙げられるだろう。RP は、特定の地域に属するものではないので、英国内で特定の地域に属さない、中立的が高い変種と認識されている。また、近年 RP の話し手が減りつつあることから、より中立性が高まっていると考えられる。ただ、知識階級に話し手が多いという点で完全に中立ではない。アメリカ合衆国の network English (放送網英語) も国内では中立的な印象をもつが、米国という特定地域で話されるという点で、特定の地域に偏っていることになる。

現行の TOEIC テストのリスニング・セクションでは、米・英以外に、オーストラリア・カナダの発音変種が出題されるため、この2つの英語変種も、世界の英語発音の標準形と認められているといっただろう。しかし、中立という観点から見れば、どちらもそれぞれの国と強く結びついているので、不適切ということになってしまう。

- 9 筆者の指導経験と、英語教員の知人から得た情報に基づく。この現象の背景には、若い世代の、外来語からはじまった和語にまで拡大した平板アクセント現象があると筆者は推察している。
- 10 実現には相当の時間がかかるだろうが、入学試験・英語検定試験等においても、このような英米文化と直結する問題は出題しないように英語教育界から働きかけることも必要だろう。
- 11 この発想の延長には、現行の英語の綴りを変更することも含まれるだろう。過去において、米国の Noah Webster が、英語の綴りが発音と結びつかない点を憂い、自ら綴り字改革を試みた結果、米国英語と英国英語の綴りの違いが生じた。アメリカ合衆国では、foto (photo), sox (socks), tho (though), tonite (tonight) のような音声を意識した綴りが、特に広告の分野で一般的になっている (Hardy 1998)。筆者自身、インターネット上でこのような綴りを目にすることがよくある。長期的に見れば、このような綴り字の変化が、ネット以外の場に波及していく可能性もあるだろう。

## 参考文献

- 榎木園鉄也. 2012. 『インド英語のリスニング』 研究社.
- Hardy, V. 1998. *Separate and Equal: British English and American English*. Macmillan Languagehouse.
- 本名信行. 2003. 『世界の英語を歩く』 集英社.
- 松澤喜好. 2004. 『英語耳 発音ができるとリスニングができる』 アスキー.
- 文部科学省. 2008. 『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省. 2009. 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』
- Nerriere, J. and D. Hon. 2009. *Globish The World Over*. International Globish Institute.
- 清水あつ子. 2011. 「国際語としての英語と発音教育」『音声研究』第15巻第1号, 44-61.
- 末延岑生. 2010. 『ニホン英語は世界で通じる』 平凡社.
- . 2011. 「Open Japanese (ニホン英語) をデザインする」『芸術工学2011』(神戸芸術工科大学).  
kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/.../11/4\_suenobu\_2011.pdf (11/17/2012入手, 掲載ページの記載なし)
- 鈴木 博. 1992. 「言語技術としてのプロソディー」『言語』第21巻第9号, 38-45.
- 手島 良. 2011. 「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題—」『音声研究』第15巻第1号, 31-43.
- 津田幸男. 2011. 『日本語防衛論』 小学館.